

令和5年度第2回川口市環境審議会議事録

- 1 開催日時 令和6年2月20日(火)
午前10時00分～午前11時17分
- 2 開催場所 川口市役所第一本庁舎6階601大会議室
- 3 出席者 (1) 川口市環境審議会委員：14名
知識経験者 : ◎増田幸宏・根本久・神田美代子・河原元・
駒形誠
民間団体の代表者 : 竹中紀子・○斉藤照夫・橋本由利子
業界関係者 : 田中知雄・岩崎康彦・遠山明宏・青木祥禎・
永井光義・有山裕之
(◎が会長、○が副会長。)
- (2) 幹事：3名
河川課長代理・みどり課長(松嶋広昌)・
下水道建設課長(山本敏)
- (3) 事務局：15名
環境部長(須藤伯夫)・環境総務課長(金野秀喜)・
自然保護対策課長(池田正義)・環境保全課長(白石浩一)・
資源循環課長(佐藤勇一)・産業廃棄物対策課長(中村将)
他9名
- 4 委員欠席者 1名 田中宣充
- 5 傍聴人 なし
- 6 議題 生物多様性保全の取り組みについて

7 審議会議事録

1	開	会
2	会長	あいさつ
3	議	事

生物多様性保全の取り組みについて	
事務局	資料「川口市における生物多様性保全の取り組み」に基づき説明。
会長	資料 P. 10 市の取り組みが、経済部、都市計画部、建設部も関わっており、関係部署が多岐にわたることが印象的であった。 国際的な動向として G7 サミットで 30by30 という国際的な約束が結ばれたり、TNFD の枠組みにおいて民間企業も自然環境や生物多様性との関わりや影響を説明していく活動が世界的に見て重みを増したりしている。このような動向がある中での市の取り組みということで、重要な箇所が多々あったと思う。
委員	令和 4 年の年間確認種数について、資料 P. 8 川口いきもの調査は 832 種で、資料 P. 13 生態系調査は 913 種となっているが、これらの数字はオーバーラップするものか。
事務局	生態系調査の調査場所は 5 か所だが、川口いきもの調査は市内全域であるため、オーバーラップするものとしめないものがある。川口いきもの調査員の中には、希少性の高い生きものの報告や発見を狙っている方もいらっしゃるため、そのような報告もある。
委員	川口いきもの調査は、2 歳から 80 歳以上の幅広い年齢の 314 名の市民が参加しているが、その調査報告は単なる普及啓発イベントとしての評価しか得られず、いわゆるお遊びで終わっているようで大変残念である。ボランティアの市民の真摯な調査を軽視している一方で、業者には生態系調査という何か専門性があるような言い方で調査委託費を払っているにも関わらず、令和 4 年の生態系調査の調査結果は 913 種と川口いきもの調査と同程度である。専門業者が行っているとしては確認種数が少ないのではないか。業者の行っている方法に何か欠陥があるのではないか。もっと市民の調査を信頼し、市民が自然の中で様々な生きものと共生できる社会の実現に向けて寄与するべきではないか。川口いきもの調査は市民参加を基本とし、業者の調査は外来種等に特化すべきと考える。
事務局	まず、川口いきもの調査をお遊びと捉えていることや、軽視していることはない。調査は、子どもや初心者の方にも気軽に参加してもらえるよう導入の役割を担っている。3 月末に発行を予定している川口いきもの図鑑には、市民の調査情報や写真を多く掲載し、生物多様性の大切さやエコロジカルネットワークの説明をする予定である。次に、生態系調査の結果数は、過去の結果を踏まえると、特別少ないという認識はない。単純比較はできないが、平成 3 年度の植生調査では 843 種の植物、平成 6 年度の動物調査では 134 種の昆虫や 90 種の鳥類が確認されている。

会長	<p>調査の本来の目的を市民に対してよりわかりやすく説明して欲しい。</p> <p>資料 P. 11 蝶の標本は、市内で採集したものを展示しているということですごくいいことだと感じた。ぜひ市民に見てもらいたい。</p> <p>アライグマの駆除は、市民からの要請があつて対応するという手順なのか。</p>
事務局	<p>アライグマの駆除手順は、会長のお見込みどおりである。市民から被害状況の報告や、被害のおそれがあるとの連絡をうけ、罠を設置している。</p>
委員	<p>資料 P. 11 オオゴマダラの特別展示で、本来オオゴマダラは、沖縄南西諸島のジャングルの樹間を優雅にふわふわと飛ぶが、展示ではテントの中で息苦しそうにしていた。真の生きもの教育というのは、いろいろな生きものが、様々な環境で、どのような生活をしているか知ることだ。生物多様性とはそのようなものだと認識している。</p> <p>また、2月7日のテレビ放送で荒川は外来魚に占拠されて実害が生じているという内容があつた。芝川もそうであろう。原因は、圧倒的に人為的放流によるものだそうだ。蝶についても浦和で高山蝶が採れたという報告があり、飼育個体の放蝶の可能性がある。自身も領家2丁目でオオゴマダラを目撃した。台風の接近もなかったため北上個体の可能性は低い。放蝶によるものではないか。資料 P. 15 で放蝶を禁止しているが、本来いないはずの蝶がいるということは、生態系の攪乱であり破壊だ。</p>
会長	<p>特別展示の内容とオオゴマダラを目撃情報についてご発言いただいた。目撃は何月であつたか。</p>
委員	<p>10月16日である。</p>
事務局	<p>オオゴマダラは、南方に生息しており川口市には本来生息していない蝶だが、縁あつて展示できることになったため、特別に展示した。説明にあたり誤解を招いたとしたらお詫びする。展示方法については、今後再度展示の機会があれば配慮していく。</p> <p>特定外来生物に限らず、そこにいない生きものを別の場所に放すことはいけないということを、改めて川口いきもの通信等の紙面を通じて広く周知するよう検討していく。</p>
会長	<p>ありのままの形で展示することや、生きものを別の場所に放すことの影響は、いずれも今後重要になってくるだろう。</p>
委員	<p>他委員からオオゴマダラの特別展示の意見があつたが、カブトムシの展示には、子どもと一緒に参加したことがある。展示方法は検討の余地があるとのことだが、このような大きな蝶が存在するということを市民に啓発することが活動の趣旨であろう。市民に環境について興味をもってもらうきっかけとして有意義であるため、今後も積極的にイベントを行っていただきたい。</p>

会長	延べ 3,396 人が来場したとのことで、イベントの持つ力は大きいと感じた。
委員	<p>資料 P.6 イイナパーク川口で人工的な生息地を実現したことは、生きものがあることによってみどり果たしている大切な役割を知ることができるため、環境学習を質の高いものにしていくにあたりとても良いと思う。新宿御苑でリスの生息を目指したが、歌舞伎町に住み着くカラスとの共生ができず、うまくいかなかったという事例があった。それに対しイイナパーク川口では、生態系ピラミッドの下の方にいる環境を整えば遅く生息してくれる昆虫を選んでおり、良い着眼点であると思う。生物多様性について、座学ではなく実際に触れたり見たりして分かる場があるのは、効果的ではないか。</p> <p>また、オオゴマダラの特別展示については、大きい蝶が存在するということを知ることが大切であろう。確かに放蝶されると遺伝子の交雑がおこる危険性があるが、管理された場所で放たれた蝶を市民が見ることが一概に悪いとは言えない。生きもの特性も説明して実施していく必要がある。</p>
会長	ザリガニ等、子どもたちの関心が高く、環境学習の情報発信にとって良いタイミングであろう。
委員	知り合いの埼玉県在住の人がゴマダラチョウの幼虫の見つけ方を知っていて、それを東京都在住の人に伝えたら実際に発見したことがあった。そのため、ゴマダラチョウは埼玉県に生息していると思う。
会長	食草はあるのか。
委員	エノキである。
委員	昆虫等が増えていく環境を整えることは、アライグマも増えていくことにつながるのではないかと。駆除促進の考え方はどうなっているのか。
事務局	<p>委員ご指摘のとおり生物多様性の保全をしてくことは、都市として弊害もある。みどりを増やすことは大切だが、落ち葉の管理や、鳥が集まって問題となることがある。自然と共生していくということを同時に広めていかないといけない。</p> <p>アライグマに関しては、川口市で増やさないために、生息しにくい環境にする必要がある。巣となる家に入らせないようにすることや、生息地やエサとなるカキの木などの樹木が放置されないよう空き家対策をするなどがある。</p>
委員	増えてきてから駆除すると、北海道のクマのように反対意見も大きくなるだろう。資料 P.14 で今年度 73 頭駆除していることを鑑みると早めに手を打った方が、人間にとってもアライグマにとっても良いのではないかと。昆虫を増やすことは、アライグマを増やすことにつながるため、駆除にも力を入れたほうが良いと思う。

事務局	埼玉県防除計画や法に基づき行っている事業のため、行える範囲に限りがある。他市の状況を研究していく。委員ご指摘のとおり喫緊の課題であることは認識している。
委員	クマの問題は、人間の住む地域への侵入を防ぐ役割を果たしていた里山が荒廃し、生息地の境界が曖昧になったことが原因とされている。国でも検討会を設け安定した共生に向け進んでいる。構造的問題があり難しいことであるが解決に向かっていくのではないかと。
会長	リスとカラスや、昆虫の生息環境とアライグマ、クマと里山など、生きものには相互に関係性があり、構造的な問題もあるため広い視野が必要だろう。
事務局	現在、川口市にクマが出現する想定はしてない。しかし、人間が里山を守らなくなったから、里山も人間を守ってくれなくなったという認識をしておき、健全な緑地の保全は大切だと考えている。
委員	アライグマの捕獲数は年々増加しているが、捕獲される地域に偏りはあるのか。
事務局	アライグマは市内全域で捕獲されている。今年度 1 月末現在の罠の設置件数は、全 240 件である。その内、神根地区 43 件、戸塚地区 33 件、新郷地区 30 件の順で多い。設置後の捕獲件数も神根地区が一位である。
委員	川口いきもの調査に子どもと参加したことがある。確認数等の結果につなげる意識ではなく「色々な生きものがあるのだ」と楽しく参加していた。また、資料 P. 10 子どもネイチャー教室のカブトムシ飼育も参加している。どちらも自宅では出会うことがない生きものに触れる機会になりありがたい。イベント後にカブトムシを自宅に持ち帰り飼育することを 9 年続けた結果、始めは怖がっていた子どもも次第に育てられるようになり、昆虫自体苦手でなくなっていった。市の取り組みがなければ、このような子に育てることは難しかっただろう。 単に参加者数に加わっているだけで、調査結果の内容等、具体的な結果のお役には立ててはいないが、広く見て市の発展につながっていると思う。
会長	なかなか数値として評価できるものではないが、大変重要なことだと思う。
事務局	委員は役に立てていないとおっしゃっていたが、そのようなことは決してない。地球規模で生物多様性の喪失が問題視されている中で、1 人 1 人が自分事として身近なところから考えることが大切であるため、カブトムシを通して命の大切さや生きもの多様性の大切さが分かれば、地球規模の問題を良くしようとしていることになると思う。
会長	川口いきもの調査の対象は、成虫だけでなく幼虫も含まれるのか。
事務局	幼虫も含まれる。

その他	
会長	全体を通じて質問・意見はあるか。
委員	質問・意見特になし。
会長	他になければ本日の議事を終了とする。
4 閉	会